

日高八雲神社「忠魂碑」について
 .. 附「徴馬記念碑」

整理番号	題額	題額揮毫	碑記撰文	碑記揮毫
日高〇一	忠魂碑	大迫尚敏	発智庄平	発智庄平

鑄刻	撰文建碑年	住所	場所	備考
小池銀次郎	一九一三・大正二	高萩	八坂神社(高萩神社)	

一. はじめに

本石碑は、日露戦争に従軍した日高市高萩地区の若者たちについて顕彰するとともに、戦死者を追悼する「忠魂碑」である。徴発された軍馬をまつる「記念碑」が併設されている。碑の立つ神社は八坂神社だが、通称として高萩神社とも呼ばれる。

○写真1 忠魂碑正面



○写真2 題額





○写真5 「徴馬記念碑」正面



○写真4 「碑記」部分



○写真3 忠魂碑背面

二 翻刻並に訳注

■翻刻

*正面

◎題額

忠魂碑

陸軍大將正三位子爵大迫尚敏書

*背面

◎碑記

忠魂碑陰銘

曩露國之侵東亞也一舉將略朝鮮朝鮮若亾乎我外垣以壞外防以崩國家豈可一日寧息乎於是睿聖文武

明治天皇赫然震怒爰興六師征討露國朦朧艦蔽海以進旭旗翻于雞林之野征馬嘶於滿州之原熊羆之士奮擊進鬪砲

聲撼天劍光閃地無戰不勝無攻不取就中旅順之爲地要塞險阻稱難攻不落彼據焉抗我我軍圍之半歲惡戰苦鬪相

繼鮮血迸肉塊飛死傷簇出不可勝算然以

天皇之稜威與將卒之忠勇遂攻陷之矣於是乎日露之勝敗以決東亞之大局以定國運隆勃興得以列于世界第一等國

之班於戲豈不盛哉是役入間郡高萩村民從軍者九十二人而戰死若病没者凡十人曰陸軍歩兵伍長勲八等功七級

佐久間熊太郎同上等兵勲八等功七級天野勘藏同上等兵勲八等功七級須間九十九治同砲兵上等兵勲八等功七

級清水佐太郎同歩兵一等卒勲八等大河原代造同一等卒勲八等功七級岡村兼吉同一等卒勲八等長岡鶴吉同一等卒勲八等大河原菊造同輜重輸卒岡野藤吉郎同輜重輸卒金子茂十郎概皆賜勲章賞其功亦可謂死有餘榮矣頃者帝國在郷軍人會高萩分會諸氏相謀東西奔走得村有志者之贊助建忠魂碑於郷校之前請揮毫於大迫陸軍大將大將喜書以賜焉碑面三大字則是又囑余作碑陰文余大嘉諸氏之協心戮力完成義舉因不以不文辭叙其梗概係之以銘曰

入間之水 奔流湯湯 秩父之岳 秀聳崢嶸 征露役起 奮辭此郷
所在力戰 破陣陷城 惟忠惟勇 取義舍生 功名萬古 岳崇水長

日本弘道會理事兼霞關支會長發智庄平撰并書

大正二年癸丑十一月下浣

建設發起 帝國在郷軍人會高萩分會

全 贊助 高萩村有志者一同

川越小池銀次郎鐫

*異体字等

○亾 亡。 ○國 國。 ○險 嶮。 ○歲 歲。 ○隆 隆。 ○等 等。 ○勲 勳。 ○兼 兼。 ○迫 迫。
○撰 撰。

*漢籍の表記法に倣い、「明治天皇」を二字分上げ、「天皇」を一字分上げて、全体を二字分下げて記載している。

■ 訳注

● 本文（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

◎ 題額

忠魂碑

陸軍大將正三位子爵大迫尚敏書

◎ 碑記

忠魂碑陰銘

曩、露國之侵東亞也、一舉將略朝鮮。

朝鮮若亡乎、我外垣以壞、外防以崩、國家豈可一日寧息乎。

於是睿聖文武明治天皇、赫然震怒、爰興六師、征討露國。

艤艦闢艦蔽海以進、旭旗翻于雞林之野、征馬嘶於滿州之原、熊羆之士奮擊進闕。

砲聲撼天、劍光閃地。

無戰不勝、無攻不取。

就中、旅順之爲地、要塞險阻、稱難攻不落。彼據焉、抗我。

我軍圍之半歲、惡戰苦鬪、相繼鮮血迸、肉塊飛、死傷簇出、不可勝算。

然、以天皇之稜威與將卒之忠勇、遂攻陷之矣。

於是乎、日露之勝敗以決、東亞之大局以定。

國運隆隆勃興、得以列于世界第一等國之班。

於戲豈不盛哉。

是役、入間郡高萩村民從軍者九十二人。而戰死若病没者凡十人。

曰、

陸軍歩兵伍長勲八等功七級佐久間熊太郎、

同 上等兵勲八等功七級天野勘藏、

同 上等兵勲八等功七級須間九十九治、

同 砲兵上等兵勲八等功七級清水佐太郎、

同 歩兵一等卒勲八等大河原代造、

同 一等卒勲八等功七級岡村兼吉、

同 一等卒勲八等長岡鶴吉、

同 二等卒勲八等大河原菊造、

同 輜重輸卒岡野藤吉郎、

同 輜重輸卒金子茂十郎。

概皆賜勲章、賞其功。亦可謂死有餘榮矣。

頃者、帝國在郷軍人會高萩分會諸氏、相謀、東西奔走、得村有志者之贊助、建忠魂碑於

郷校之前。

請揮毫於大迫陸軍大將。

大將喜、書以賜焉。

碑面三大字、則是。

又囑余作碑陰文。

余大嘉諸氏之協心戮力完成義舉。

因不以不文辭、叙其梗概、係之以銘。
曰、

人間之水、奔流湯湯。秩父之岳、秀聳崢嶸。
征露役起、奮辭此鄉。所在力戰、破陣陷城。
惟忠惟勇、取義舍生。功名萬古、岳崇水長。

日本弘道會理事兼霞關支會長發智庄平撰并書。

大正二年癸丑十一月下浣

建設發起、帝國在郷軍人會高萩分會。

全 贊助、高萩村有志者一同。

● 訓詁

忠魂碑陰の銘。

曩さきに、露國の東亞を侵すや、一舉にして將に朝鮮を略せんとす。

朝鮮若し亡ほろばば、我が外垣は以て壞れ、外防は以て崩る。國家豈に一日として寧息すべけんや。

是において睿聖文武なる明治天皇、赫然として震怒し、爰こゝに六師を興し、露國を征討す。

艤ひるがへ艦 海を蔽ひて以て進み、旭旗は雞林の野に翻ひるがへり、征馬は滿州の原に嘶き、熊

羆の士奮擊進闘す。

砲聲天を撼うごかし、劍光地に閃ひらく。

戰ふとして勝たざるはなく、攻むるとして取らざるはなし。

就なかならず中、旅順の地たる、要塞嶮阻にして、難攻不落と稱す。彼こゝ焉に據り、我に抗す。

我が軍之を圍むこと半歳、惡戰苦闘し、相繼ぎて鮮血迸り、肉塊飛び、死傷の簇出すること、算ふるに勝ふべからず。

然りして、天皇の稜威と將卒の忠勇とを以て、遂に之を攻め陥とせり。

是においてか、日露の勝敗以て決し、東亞の大局以て定まる。

國運隆隆として勃興し、以て世界一等國の班に列するを得たり。

於戲あゝ、豈に盛んならざるか。

是の役、入間郡高萩村民、從軍せる者九十二人にして、戰死若しくは病没せる者凡そ十人なり。

曰く、

陸軍歩兵伍長勲八等功七級佐久間熊太郎、

同 上等兵勲八等功七級天野勘藏、

同 上等兵勲八等功七級須間九十九治、

同 砲兵上等兵勲八等功七級清水佐太郎、

同 歩兵一等卒勲八等大河原代造、

同 一等卒勲八等功七級岡村兼吉、

同 一等卒勲八等長岡鶴吉、

同 二等卒勲八等大河原菊造、

同 輜重輸卒岡野藤吉郎、

同 輜重輸卒金子茂十郎。

概ね皆な勲章を賜り、其の功を賞せらる。亦た死して餘榮有りと謂ふべし。
頃者、帝國在郷軍人會高萩分會の諸氏、相ひ謀り、東西奔走し、村有志者の賛助を得、
忠魂碑を郷校の前に建つ。
揮毫を大迫陸軍大將に請ふ。
大將喜び、書して以て賜へり。
碑面の三大字、則ち是れなり。
又た余に囑して碑陰の文を作らしむ。
余大いに諸氏の協心戮力して義舉を完成するを嘉す。
困りて文辞ならざるを以てせずして、其の梗概を敘し、之に係くるに銘を以てす。
曰く、

入間の水は、奔流湯湯たり

秩父の岳は、秀聳崢嶸たり

征露の役起り、此郷を奮辭し、

所在に力戦し、陣を破り城を陥とす。

惟だ忠惟だ勇、義を取りて生を舍つ。

功名は萬古なり、岳は崇く水は長し。

日本弘道會理事兼霞關支會長發智庄平撰し并せて書す。

大正二年癸丑十一月下浣。

建設發起、帝國在郷軍人會高萩分會。

全 賛助、高萩村有志者一同。

●人物

○明治天皇 名は睦^{むつひと} 仁^に。幼名祐^{すけの} 宮^{みや}。孝明天皇の第二子。嘉永五（一八五二）年から

明治四五（一九一二）年、在位は一八六七年から。

○大迫尚敏 天保十五（一八四四）年から昭和二（一九二七）年。薩摩藩士の長男として生まれ、藩校造士館で学ぶ。薩英戦争・戊辰戦争に従軍。明治維新後、陸軍に入隊。明治十年、陸軍大尉として西南戦争に従軍。第四師団参謀長などを経て、同二十五年に陸軍少将に進み旅団長として日清戦争に従軍。陸軍中将に進み、同三十三年には初代師団長永山武四郎の後任として旭川の第七師団長に就任。日露戦争では第七師団を率いて旅順攻防戦に参加、二〇三高地攻撃に当たる。奉天会戦にも参戦し、同三十九年には陸軍大將に進む。同四十年に予備役となり、大正元年からは、殉死した乃木希典の後任として学習院院長に就任。同六年まで務めた。

○發智庄平 元治元（一八六四）年から昭和十一（一九三六）年。發智家二十七代目当主。入間郡黒須村（現入間市）の名主繁田家に生まれ、明治十六（一八八三）年に十九歳で發智家に入り婿となって家を継ぐ。家業のかたわら、埼玉県師範学校高等師範科で学び、卒業後、黒須高等小学校の訓導兼校長に任じ教育にあたる。霞ヶ関青年道德研究会や發智農会など社会人教育にも力を入れ、県内初の児童養護施設「埼玉育兒院」を援助し院長もつとめた。昭和四（一九二九）年には、「霞ヶ関カンツリークラブ」を創設した。

●注

- 一舉 一つの動作。
- 外垣 外回りの垣。
- 外防 外に対する防御。
- 寧息 やすらかに休む。
- 睿聖 睿は叡に同じ。聡明。睿聖で、理解力徳性が抜群に優れる。帝王の呼称。
- 文武 学問と武術。
- 赫然 怒るさま。
- 六師 六軍。天子の軍隊。
- 朦朧 戦船。
- 鬪艦 いくさ船、戦艦。
- 旭旗 旭日旗。朝日を模様化した旗。日本海軍の軍旗。ここでは海軍にとどまらず、日本の軍旗を言うだろう。
- 雞林 新羅の古称。のち朝鮮全体の称。
- 征馬 軍馬。
- 滿州 今の中国東北部の旧称。
- 熊羆 勇士のたとえ。
- 奮撃 力の限り攻撃する。
- 就中 とりわけ、なかでも。
- 旅順 遼東半島南端に位置する街で、ロシア海軍基地が設けられていた。
- 要塞 険しく攻めにくいところに作った砦。ここでは険しく攻めにくいさま。
- 嶮阻 嶮は險に同じ。嶮阻で地勢がけわしいさま。
- 彼 ロシア軍。
- 我 日本軍。
- 圍之半歳 旅順の戦いは、一九〇四年八月から約五ヶ月間に涉った。
- 死傷 旅順の戦いにおける日本軍の死傷者は六万人を超えた（ロシア軍三万人）。
- 簇出 簇は群がる。熟語はないが、群がるように発生する、の意味だろう。
- 稜威 天子の威光。
- 大局 全体的な情勢。
- 國運 国家の命運。
- 隆隆 勢いの盛んなさま。
- 班位、席次。
- 輜重輸卒 軍需品の輸送を任務とする兵卒。
- 餘榮 ありあまる光。死後にまで及ぶほまれ。
- 帝國在郷軍人會 在郷軍人とは、平時は郷里で生業につき、戦時には必要に応じて召集される予備役や退役の軍人。在郷軍人会は、在郷軍人の全国組織。各連隊や、地域ごとに支部会があり、町村では分会が設けられた。
- 郷校 村里の学校。
- 協心 協は、協に同じ。協心は心を一つに合わせることに。
- 戮力 戮は、勦に同じ。勦力は力を合わせることに。
- 文辞 文章。

○銘 韻文の一種。碑文は事柄を客観的に記述する散文の「碑記」と、そのことを情緒的に韻文でうたう「銘」からなる。銘を伴わない碑文もある。

○湯湯 水が盛んに流れるさま。

○崢嶸 高く険しいさま。

○所在 いたるところ、ここかしこ。

○力戦 力の限り戦う。

○日本弘道會 明治期創設の教化団体。明治九（一八七六）年西村茂樹創設の修身学舎が前身。同二十年に日本弘道会と改称。忠孝・敬神・皇室尊重をうたい、教育勅語を奉じて儒教的道徳教育を主張した。各地に分会が設けられたが、発智庄平が主導した黒須支会は活発な活動を展開していた。

○下流 下旬。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

【碑文の題】

忠魂碑背面の銘文。

【ロシアの東亜侵攻】

以前のこと、ロシアが東アジアに侵攻するや、ひとふりで今にも朝鮮を略取しそうになった。もしも朝鮮が滅亡してしまったら、我が国の外壁が壊れ、外に対する防御の仕組みが崩壊してしまう。日本国として一日もやすらかに休息することができなくなる。

【明治天皇の英断】

かくして、理解力徳性とにも優れ、文武両道に通じた明治天皇陛下は、身を震わせてお怒りになり、天子の軍隊を出動させて、ロシアを征討しようとされたのだった。

【皇軍の進軍と勝利】

大小の軍艦が海を埋めつくさんばかりに広がって進み、陸地では日本軍の軍旗が朝鮮の野原に翻り、軍馬は満州の平原で嘶き、熊羆に等しい勇猛なる日本軍兵士が力の限り攻撃し、進撃した。

大砲の音は天を動かさんばかりに響き渡り、鋭い刀剣は各地でキラリキラリと閃光を放った。

戦えば必ず勝ち、攻めれば必ず攻め落としたのである。

【旅順の戦いと勝利】

とりわけ遼東半島の要衝の地である旅順は、険しく攻めにくい險阻なところで、難攻不落と称していた。ロシア軍はここを根拠地とし、我が軍に抵抗した。

我が日本軍は旅順要塞を包囲すること半年に及び、悪戦苦闘、相次いで鮮血がほとばしり出て肉塊が飛び散るといふ大いなる被害を蒙り、死傷者が続出して数え切れないほどであった。

しかし、天皇の偉大な威光と將軍兵卒の忠義勇氣により、ついに旅順を攻め落としたのである。

【戦局の決定と日本の勃興】

この勝利により、日露戦役の勝敗は決し、東アジアにおける全体的な情勢においても、日本の優位性が定まったのである。

以後、我が国の命運は盛んに勃興し、世界一等国の席を得るに至ったのである。
ああ、なんとという盛んなことではないか。

【高萩村の従軍者】

日露の戦役において、入間郡高萩村の若者で、従軍した者は九十二人であり、そのうち十名が戦死、もしくは戦病死して帰らなかった。

英霊は以下の通り。

陸軍歩兵伍長勲八等功七級佐久間熊太郎、

同 上等兵勲八等功七級天野勘藏、

同 上等兵勲八等功七級須間九十九治、

同 砲兵上等兵勲八等功七級清水佐太郎、

同 歩兵一等卒勲八等大河原代造、

同 一等卒勲八等功七級岡村兼吉、

同 一等卒勲八等長岡鶴吉、

同 二等卒勲八等大河原菊造、

同 輜重輸卒岡野藤吉郎、

同 輜重輸卒金子茂十郎。

ほとんどが勲章を賜り、功績を賞賛された。死後に及ぶ誉があると言えよう。

【建碑の企て】

近頃、帝国在郷軍人会高萩分会の諸氏がともに相談し、東奔西走して、村の有志者の賛助を得て、忠魂碑を村の学校の前に立てることにした。

題額の揮毫を、大迫尚敏陸軍大将にお願いしたところ、大将は大変喜び、揮毫を書いてくださった。石碑正面の「忠魂碑」の三大文字がそれである。

【碑文の撰述】

さらにまた、私に石碑背面に刻む碑文の作成を依頼してきた。私は、在郷軍人会の諸氏が心を一つに合わせ、力を合わせて、忠魂碑建立という義挙を完成させたことをとてもよいことだと賛美するものである。そのため、文章によってこの間の概要を記し、さらに銘文を書き加えるものである。

【銘文】

入間の川は、奔流が蕩々といつまでも流れ

秩父の山は、空高く、険しく聳え立つ

ロシア遠征の戦役が起こり、若者達は奮い立って故郷を辞して戦地に赴いた
いたるところで力の限り戦い、敵陣を打ち破り城郭を攻め落とした

ただひたすら忠義に、ただひたすら勇敢に、命を投げ出して正義をつかみ取った

その功名は永遠に続く、秩父の高い山、入間川のこしえの流れと共に

【記事】

日本弘道会理事兼霞ヶ関支会長発智庄平が撰文し、あわせて書した。

大正二年癸丑の歳、十一月下旬。

建設の発起者は、帝国在郷軍人会高萩分会。

建設の賛助者は、高萩村有志者一同。

*付録

「徵馬紀念碑」について

■翻刻

◎題額

徵馬 紀念 碑

◎碑記

明治二十七年七月日清交戦以來皇軍頻ニ勝チ頻ニ進ム進ムニ随テ兵馬ノ多數ヲ要ス爰ニ於テ徵發令アリ高萩村馬十五頭十月一日ノ徵集ニ應ス而シテ合格スル者七頭相送テ歸ル七厩俄ニ寂寥タリト雖豈之ヲ憂ンヤ唯該馬健全戦地ニ臨テ功ヲ奉セン事ヲ國家ノ為ニ是祈ノミ
明治二十七年十月二十七日
高麗大記撰

■訳注

●本文

◎題額

徵馬紀念碑。

◎碑記

明治二十七年七月、日清交戦以來、皇軍頻ニ勝チ頻ニ進ム。進ムニ随テ、兵馬ノ多數ヲ要ス。爰ニ於テ徵發令アリ。高萩村馬十五頭、十月一日ノ徵集ニ應ス。而シテ合格スル者七頭、相送テ歸ル。七厩俄ニ寂寥タリト雖、豈之ヲ憂ンヤ。唯該馬健全、戦地ニ臨テ功ヲ奉セン事ヲ、國家ノ為ニ是祈ノミ。
明治二十七年十月二十七日、
高麗大記撰。

●人物

○高麗大記 文政九（一八二六）年から明治三十三（一九〇〇）年。字は桜陰、号は東

駒。高麗郡新堀村（現日高市）に、高麗大宮社別当職明純の長男として生まれる。漢学・国学を学び、嘉永二（一八四九）年に父のあとを継いで高麗大宮寺住職（修験）となる。父の寺子屋・私塾も受け継ぎ、近隣子弟の教育にも携わる。明治の神仏分離を受け、明治元（一八六八）年に修験をやめて復飾（還俗）し、高麗神社の司掌となる。同四（一八七二）年、飯能に郷学校が開校すると講師となり、同六（一八七三）年に小学校が設けられると私塾を閉じて小学校教員となり、同二十一（一八八八）年までつとめた。漢詩集「櫻陰詩集」がある。高麗神社に同十四（一八八一）年に門弟達によって筆塚碑が設けられたが、近隣二十ヶ村一四名の門弟の名が刻まれている。

● 語注

- 明治二十七年 西暦一八九四年。
- 日清交戦 日清戦争。七月の豊島沖海戦によって開始した。
- 皇軍 天皇が統轄する軍隊。もっぱら、日本帝国陸海軍を言う。
- 頻 何度も。
- 兵馬 軍馬。
- 七厩 出征した馬がもといた七つの厩舎。
- 寂寥 空虚であるさま。

● 口語訳

明治二十七年七月に日本と清国が交戦してより、帝国陸海軍は何度も勝利を収めては何度も進軍した。

しかし進軍するに随って、多数の軍馬が必要となった。かくして軍馬徴発令が下された。高萩村では十五頭の馬を、十一月一日の徴集に応じて献上した。ところが合格するものは七頭で、それらを見送って帰郷した。

出征した七頭のいた厩舎は、からっぽになってしまったが、どうしてそれを憂えることがあるのか。

ただ、送った馬たちが健やかで、戦地において功績を奉ることを、国家のために祈念するだけだ。

明治二十七年十月二十七日、

高麗神社宮司高麗大記が撰文した。

三. 資料

(一) 『埼玉の神社 入間 北埼玉 秩父』（埼玉県神社庁、一九八六）

◎日高市

○八坂神社

「創建は、口碑によると昔、当地に熱病がはやり、これを鎮めるために京都の八坂社から勧請したものと伝えられ、当初、曹洞宗高萩山谷雲寺の境内に鎮守として祀られたという。谷雲寺は「コクウンジ」と読むが、これは「ヤグモ」にも通じることから、当社の創建は寺の開基にかかわるものと思われ、神仏分離まで、同寺が当社の管理に当たっていた。……明治になり、神仏分離によって当社は谷雲寺境内から現在地に移転した。」

* 「新編武蔵風土記稿」「武蔵国郡村誌」に記事無し

四・主な参考資料

① 翻刻

・ 埼玉県神道青年会編『埼玉県の忠魂碑』（埼玉新聞社、二〇一七）

② 論文など

・ なし

以上

二〇二四年十二月 薄井俊二訳す